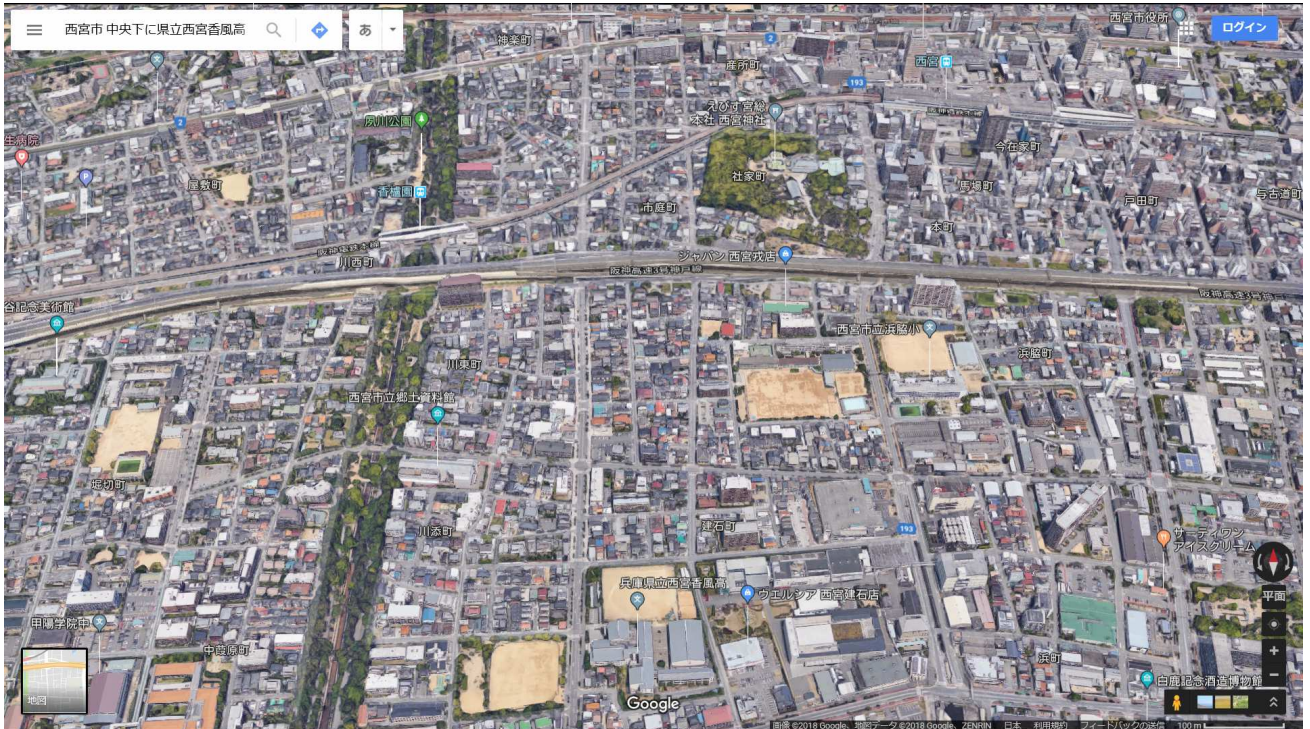


# 95年3月、神戸・西宮にて

阪神淡路大震災後の現地から<その2>



## 現在の兵庫県西宮市 県立香風高校(旧市立西宮西高)及び阪神電鉄香榎園駅の周辺を鳥瞰(bird's eye)

3月14日、火曜日朝。北西の窓から六甲を見上げると、雲こそかかっていたものの、周囲の青空は晴天を予想させた。午前中の日課の一つに、特大のポリバケツに入った生ごみとその汁を、校庭の片隅に捨てに行く作業があった。格技棟裏の空き地に捨てるのだが、この匂いには参った。その捨て場から、閉ざされている門の扉越しに、隣の「辰馬本家酒造新田蔵」の工場が見えた。清酒『白鹿』で知られる醸造元である。こちらの方は再開が早かったらしく、何事もなかったかのように、平穏に操業が続けられていた。

## 避難所の移転の話し

ところで、4月には新学期を迎える学校を避難の場としていることで、この避難所でも立ち退きと他の避難所への統合の話が進行していた。避難所を統括する教育委員会は、年度が改まるこの時期、全市的に「学校教育施設」から「社会教育施設」へと避難所を縮小・統合しようとしていた。学校の西側数百メートルの所に、中央図書館が入

る「西宮市教育文化センター」(現市立郷土資料館)を利用した避難所があった。移転候補は、ここの小ホールと言ってよい3階の一室だった。実際、現在の救援物資を移動するとなると、その置き場所まであるのか調べる必要があった。出かけてみると、廊下の一部を提供してくれることがわかった。しかし、既にここを避難所としている人と比べ、居室はかなり狭い所をあてがわれ、一方、羨望されそうなほど豊富な救援物資をもつため、すんなり「同居」が実現するのか問題も大きかった。これらは検討すべき課題の様にも思われた。

昨日、西高の先生から聞いた周辺の状況が気になっていた。教育センターから弓場町はすぐそこなので、帰りがけに寄ってみた。香榎園駅の南側を阪神電車に沿って西に向かう。線路の向かい側に広いさら地が広がると、弓場町の中心、香榎園市場のアーケードが見えて来た。そこで土煙をあげるのは、またしても自衛隊のショベルカーだった。大規模な解体作業を請け負っていた。踏切を北側に渡ってそれを遠巻きにしながら歩む。ちょ

うど反対側に回り込んだところで、『香栢園温泉』の看板を掲げた例の銭湯が孤立していた。近くで交通整理に当たっていた若い自衛隊員に、「どこから来たのか」と聞いてみた。その青年はためらいがちに「岩見沢(駐屯地)から」と答えた。この西宮周辺では、北海道からの自衛隊が投入されているようだった。

帰り道も阪神電鉄沿いの道を歩く。途中、解体中の住まいのそばを通った。その直後、バーンという音がして振り返ると、ショベルカーが解体に失敗したのか、土壁と木材が今通って来た道に崩れて溢れ、土煙がもうもうと立ち上った。思わず口と鼻を押さえた。被災地ではこの時期マスクが良く売れたと聞くが、さもありなんと思った。往來の自動車危うく崩壊に巻き込まれる所だったが、この程度の危険は日常的と言ってよかった。

## 震災時の体験を聞く

三日目ともなると、被災者や避難所を管理する町内会の方々と面識もできて、いろいろと話になる。自然と話の内容は、地震に見舞われた当日、どんな状況で生き延びたか、と言った話になった。高校に面する道路を隔ててすぐ西側、川添町の町内会長、河村実さんは、早朝散歩を日課としており、外出中に被災した貴重な経験をもつ。

1月17日の朝、家を出る時の気温は2度、湿度は70%の曇天だったという。いつもの散歩道である夙川(しゅくがわ)の西側の土手を北に向けて歩いている時、突然地震が襲った。いきなり前のめりになって座り込んだ。その時ひじを打ったが、介抱する間もなく次に、地の底から湧き上がるような大波に乗る感じになった。目の前の舗装路に亀裂が走った。暫くしてその大浪が去った時、何とかそこで持ちこたえている自分に気がついたと言う。所々亀裂が走りぐちゃぐちゃになった道を家に戻ると、自宅は倒壊こそ免れていたものの、内部は家具が折り重なって倒れ、がしゃがしゃの状態だった。家族の安全を確認した後、次に気にかかったのは隣の芦屋市在住の娘夫婦の



震災当日の西宮市で体育館に避難した人たち

事だったという。すぐにまた家を出、阪神高速道路に沿う国道43号線を西へ歩いた。地震直後、凄まじい亀裂を見ていた所が、打ち続く余震のせいか元どおりに戻っていた。芦屋付近では高速道路の被害もかなりのものだったが、幸い娘夫婦とその孫はけがもなく無事だった。

しかし、戻って来た川添町での救護活動は、凄惨そのものだったという。バールだの角材だのといった道具で、倒れた家の下から被災者を救い出す。当然「虫の息」で救い出した時にはその息も聞こえない犠牲者が、この日一日で5人出たと言う。遺体は近くの浜脇小学校(?)に運ばれた。しかし、平生とは違い当然用意すべき棺がない。会長と言う立場上、この遺体を体育館に放置しておくわけにもいかなかった。翌日は、朝からの市民でごった返す西宮市役所に出かけた。そこで市役所の担当者に掛け合い、ようやく棺を手に入れた。ところが安置していた遺体にはドライアイスの用意もなかったため、体がすっかり膨れ上がり、人によっては棺の蓋が閉まらない事もあり、大変な思いをしたという。火葬の手はずはなおのことで、市内の火葬場が使えず、大阪やその他遠くの火葬場に引き取ってもらうしかなかったという……。

市外の仮設住宅への入居が決まり、間もなく避難所を離れることになる建石町原田富久夫さんの夫婦。被災した時は二階屋の一階におり、潰されるのではと、その恐怖を語った。幸い自宅は半壊で留まる。その後しばらくは、高校のこの避





### 1、2階が潰れた市内のマンションN

難所と屋根が崩れて危なっかしい自宅とを行ったり来たりしていたが、3月に入って雨も降ったりしたためだろう終に自宅が倒壊。潰れた家の下から段ボールに入ったみかんを出してきて、避難所の皆に配っていた。その原田さんは明日ここを去るという。仮設では犬は飼えないと聞いて、買っていた犬を和歌山の親戚の所に送っていた。こうした人たちの不満は、行政の都合で現住地に近い仮設に入れるとは限らないことで、残された避難者も是非とも高校の校庭に仮設を建ててほしいと訴えていた。

避難者の中に、幼い双子の男の子を抱えた斉藤一家があった。その兄にあたる長男哲也君は16歳、高校2年で人懐っこいせいか、一番話をした避難者の1人だった。地震が起きた時、一家は高校の北側、阪神高速に近い荒戎町の2階建て木造アパート菊水荘の1階に暮らしていた。父とは8歳の時に死別。母親が近くの『日本盛』の醸造元、西宮酒造に勤めて生計を支えて来たという。母を助けるため高校の進学時、哲也君は県立尼崎工業高校の定時制を選び、西宮市東部の今津町辺りの部品工場に昼間は働きに出ていた。直ぐ下に妹がいて、高校生になったその妹も働きに出ていたという。さらに中学生の弟、小学生の双子の弟と、彼は五人兄弟の頭だった。

1月17日の朝、地震が襲ってくると、老朽化した木賃アパートはあっという間に二階から潰れて来たという。早朝の薄明の中、近所の人たちが駆けつけて救出が始まった。その中には向かいに

住む、前回も述べた西高の広永先生もいたそうだ。1時間半近くたった頃、哲也君はようやく傷を負った体を助け出してもらった。救急車が来るはずもなく、市役所に隣接したあの県立病院まで、近くの人が車を出して向かった。阪神高速道路が落ちたこともあり、道路は至る所で寸断され、普段の3倍近くかけて病院に到着した。病院では腕に応急処置をされただけで返されたが、彼を待っていたのはすぐ下の妹と弟の死亡の知らせだった。顔をひっぱいたり、心臓マッサージを施したり、ありとあらゆる手立てを尽くしたが、二人の体は蘇(よみがえ)らなかったという。

荒戎町に戻ってくると、住まいがめちゃくちゃに壊れた以上、当面の居場所を考えねばならなかった。人づてに高校が門を開けたことを聞いて、残された家族と出かけると、校舎の方はもういっばいで、床が凍えるほど冷たい格技棟に収容された。あの頃、全国的にインフルエンザがはやっていた。都立高の自分が担任していたクラスでも、学級閉鎖かと思うほど多数の欠席者が出たことを覚えている。哲也君も高熱を出し、丁度職場と学校を休んでいた時に被災した。その晩は、この熱にうなされながら、打ち続く余震にさいなまれながら、二十数回もトイレに立たねばならなかった。一週間ほどで、避難していた全員がこの体育館の方に移され、以来ここに居続けているという。勤め先は地震による仕事の激減を理由に解雇された。そのため、昼間もここにいる以外行くところがないと言う。

哲也君は親しくしていたすぐ下の弟妹を失ったせいか、いつも何となく憂鬱な顔をしていた。言葉は饒舌だったが、その目からは悲しみしか出てこない様だった。聞いているこちらにできることは何もない。ただ、話を聞いてやるだけだった・・・。

### 風呂にはいることができた！

現地に来るまで、滞在中に風呂に入ろうなどとは思わなかった。しかし、避難所には再開した銭

湯の情報まで壁に掲示してあった。埼玉から来た K氏とは、今夜こそ行こうと話合っていた。そこで仕事をはけてから出かけてみた。香櫨園駅南側の市庭町に鉄骨三階建てのいかにも現代的な『市庭温泉』が店を開いていた。夜も 10 時を過ぎていているというのに、銭湯は男湯も女湯も満員で入り口には行列が出来、店主がさぼく状態だった。昼間夙川沿いを歩いた時、西宮市社会福祉協議会がカセット・コンロのガス缶を配っているのを見ていた。近辺にガスが開通していない所があるのだなあとと思ったが、そうならば銭湯に詰めかけるのは当たり前と思い当たった。中には連日の土埃の中で、解体作業に従事していると思われる作業服姿の人もいた。洗い場は芋を洗うような混雑だったが、4 日ぶりの風呂はさすがに気持ち良かった。見たところ、新築間もないこのビルは大した被害も受けず、タイルや水栓に傷らしいものを見ることもなかった。

3 月 15 日、水曜日。いつものように六甲を見上げると、今日は雲一つない上天気。この日はそのまま夕刻まで、近畿地方は晴れに恵まれた。夕方には西宮を発って、JR で帰京しようと予定していたので、昼を過ぎてからは暇を見つけて、西高の関係者に学校のありようを尋ねに行った。地震の直後、学校に駆け付けた人の話を聞くと、先ずこの学校の建物が丈夫でそれ自体大した被害を受けなかったところから、すべては始まったという。職員室の奥、太いコンクリート柱をおおうステンレスの板をとると、中から校舎増築の際につなげた個所の切れ目が現れた。この継ぎ目で 5 センチ位ずれたことがわかる。しかし一番古い箇所はもとより戦後に建てられた部分も含めて、構造体には何の被害もなかった。

## 西宮市立西宮高等学校

西高の前身は二十年ほど前、六甲の麓に移った市立西宮高校だが、当時、移転理由の一つに校舎の老朽化があがったという。その西宮高校が移転先で使い物にならない位、校舎に亀裂を生じたの

に対し、老朽化したはずの西高はびくともしなかった。この皮肉な事態に西高の先生は苦笑していた。それでも受け止めた揺れに大差が生じるはずもなく、置いていたロッカーの類は軒並み倒れ、殊に事務室などに置かれた上下二連の書棚などは、上の扉が飛んで落ちるほどの揺れだったという。地震がもし授業中の学校を襲ったらどうなっていたらと思うと、恐ろしい気持ちになった。

校庭に干しておいた寝袋を取り込んだ。帰り支度ができたとこで、もう一度例の「調布市商工会議所」提供の自転車を貸してもらった。出かけたのは西高の先生からその都度聞かされていた半壊の市立西宮高校だった。六甲の山並みが東になだらかに降りてくる、市内在家町にそれはあった。自転車でもゆっくり行くと 20 分はかかる距離だが、途中道がわからなくなり、この坂を上がれば関西学院大学のキャンパスと言う上ヶ原の公民館で道を聞くことになった。ここでも同じ建物の一階にある図書館の分館が避難所になっており、不自由な暮らしを強いられる人たちに会った。館員の女性は親切に道を教えてくれたが、肩からぶら下げたカメラには渋い顔をしていた。

縦ズレを起こした市立西宮高校の校舎



西宮高の校地は、東西を緩やかな丘に挟まれた狭い谷地にあり、手前にせき止めて造った新池があることから、埋め立てた造成地上にあることは明らかだった。柔らかい地盤が揺れを増幅させた想像するに難くない場所だった。その校庭は、新学期を前にした今、生徒を収容する仮設・平屋のプレハブ校舎を建設するのに急ピッチだった。そしてその奥に立ちほだかるように、鉄筋 5 階建

ての校舎が二棟並行して立っていた。午後の陽に照らされ、白い壁の建物は一見明るい印象を与えた。しかし、東寄りの亀裂が入った所には、断層のズレによるものなのか、ぐしゃっと縦方向にずれてあたかも切断されたかのような破壊を生じていた。これでは建て替えるしかないと思うその光景をしばし眺めた。地震という自然現象のもたらす影響の大きさを思ったものである。

ほんのつかの間の滞在だったが、もう帰らねばならぬ時が来た。交代で詰めている町内会長に挨拶し、今日も避難所移転の事で折衝中の校長に軽く会釈し、ボランティア仲間と記念撮影した後、別れを告げた。最後にがらんと人気のない昼間の体育館に入り、哲也君を見つけて「頑張れよ！」と一言伝えた。言葉少なく、顔に笑みが浮かばないことが気になったが、そのまま体育館を後にするしかなかった。それから、荷物をもって学校の正門を出た。振り返ると、門の向こう正面玄関の上には、来た時に見上げた「ボクシング部インターハイ出場」の横断幕が、今日もかかっていた。

夙川の土手を北に向かい、この二三日の体験を振り返りながら歩いた。もう半月もするとこの土手の桜にも花が開くだろう。春が来た時にどれだけの被災者が再起し、復興の足音を速めて行くことができるのだろうか。思いは様々にめぐり、それはJR西宮駅から京都行きの快速に乗り、尼崎辺りで被災の青いビニール・シートが見えなくなるまで、続いた。

<了>



春の夙川は桜の花におおわれる